

文部省檢定濟

教科書文庫
4
815
41-1923
2000080453

文學博士吉澤義則著

中等新國文典 全

東京

修文館藏版

41875

教科書文庫

4
815
41-1923
20000 80953

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

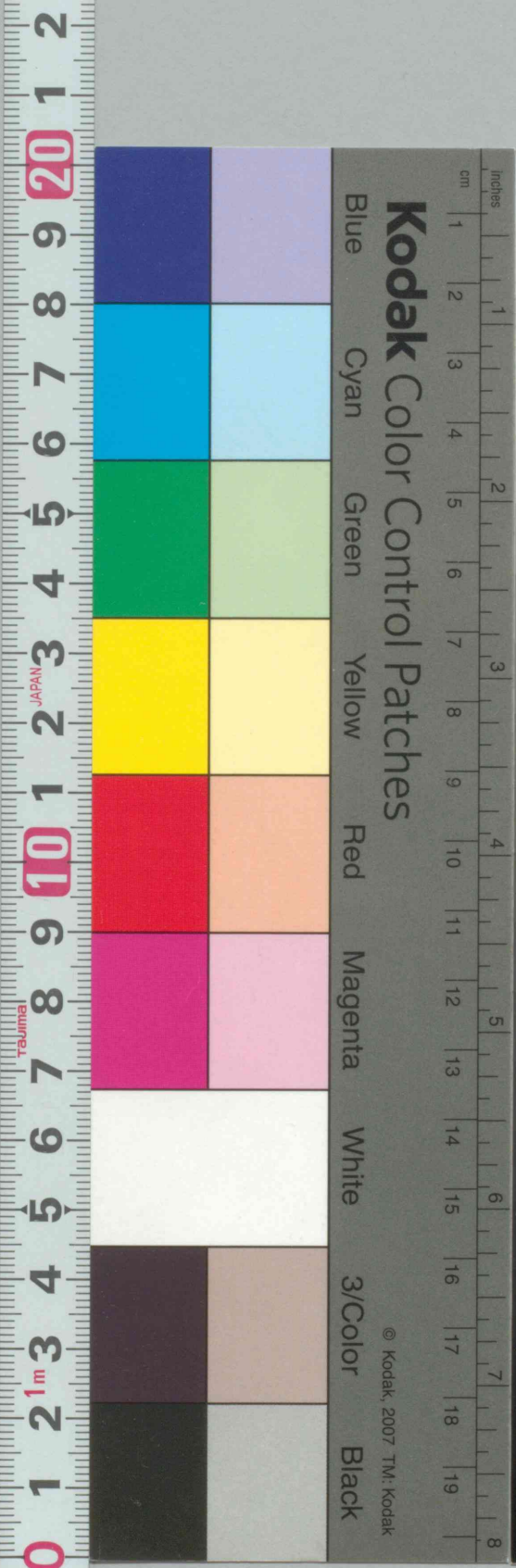
C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

教科書文庫

4

815

41-1923

2000080453

濟定檢省部文

用科語國校學範師・校學中 日六十二月一年二十正大

文學博士吉澤義則著

中等新國文典 全

東京 修文館藏版

広島大学図書

2000080453



4a
815
T.12



例言

一 本書は中學校及び之と同程度の中等學校に於ける文法教科書に充てんが爲、その教授要目に準據して編纂せるものなり。

一 本書は成るべく煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明なる説明を與へ、生徒をして容易に日本文法の一般的知識を了得せしめ、讀書に作文に直に之を應用せしめんことに力を用ひたり。

一 近年文の組織を説きつゝ品詞の意義用法を述ぶること行はる。然れども始めて文法を學ぶ者にとりては、猶品詞より入りて文に及ぶ方、理解し易く、且つ適當なりと思惟し、本書はその順序に従ひたり。

一 本書の編纂に當り、助動詞の意義用法、動詞と助動詞及び助動詞相互の接續、助詞の意義用法等、學生の誤り易きもの説明には特に意を用ひたり。

一 文例は成るべく生徒の實生活に緊密なるものを選び、作文及び讀本との聯絡に注意せり。

大正十一年十一月

著者識す

中等新國文典目次

單語篇 (上)

第一章	單語	一
第二章	名詞	二
第三章	數詞	四
第四章	代名詞	六
第五章	動詞	一〇
第六章	形容詞	三
第七章	副詞	三
第八章	接續詞	五
第九章	感動詞	七

第十章 助動詞……………一八

第十一章 助詞……………二二

單語篇 (下)

第一章 動詞の活用……………三五

一 四段活用……………三六

二 上二段活用……………三六

三 上一段活用……………三七

四 下二段活用……………三六

五 下一段活用……………三九

六 カ行變格活用……………三九

七 サ行變格活用……………三〇

八 ナ行變格活用……………三一

九 ラ行變格活用……………三一

二 動詞活用の識別法……………三一

第二章 動詞の活用形……………三七

第三章 口語の動詞……………四〇

第四章 形容詞の活用……………四六

第五章 音 便……………五〇

第六章 助動詞の種類及活用……………五五

一 受身の助動詞……………五五

二 可能の助動詞……………五五

三 使役の助動詞……………五七

四 被役の助動詞……………五八

五 崇敬の助動詞……………五九

六 時の助動詞	六一
七 推量の助動詞	六二
八 打消の助動詞	六六
九 指定の助動詞	六九
一〇 咏嘆の助動詞	七〇
一一 比況の助動詞	七二
一二 希望の助動詞	七三
第七章 助動詞と動詞との接續	七四
第八章 助動詞相互の接續	八二
第九章 助詞の用法	八六
一 ぞ・なんこそ	八六
二 や・か	八八
三 ば・と・ら・ん・ん・ん	九二

文章篇

四 と	九四
五 だにすらさへ	九六
六 ななこそ	九七
七 ばやなむ	九八
八 にへ	九九
九 がにを	一〇〇
一〇 てで	一〇〇
第十章 接頭語接尾語	一〇三
第十二章 品詞の轉成	一〇五
第一章 文の成分	一〇九
第二章 文の成分の位置と省略	一一八
第三章 句及び節	一二三

第四章 文の構造上の種類……………三五

第五章 文の性質上の種類……………三七

附録 文法上許容ニ關スル事項

表

第一表 {文語動詞活用表
口語動詞活用表

第二表 {文語形容詞活用表
口語形容詞活用表

第三表 文語助動詞活用表

第四表 口語助動詞活用表

第五表 動詞助動詞接續法

第六表 接續助詞と動詞形容詞との接續法

中等新國文典目次終

中等新國文典

文學博士 吉澤義則著

單語篇 (上)

第一章 單語

- (一) 大君の惠の露はあまねく民草を露せり。
- (二) 燈火の影は水に映りて星の如く花の如し。

右の例に於て傍線を施せる一つくの語は、皆それ〴〵或意味を表す。かくの如く或る意味を表す言語の單位を單語といふ。而してこれ等の例の如く、いくつかの單語が集

單語

12.4.18

文章

單に文ともいふ

品詞

まりて纏りたる思想を表したるものを文章といふ。
單語をその意味・職能・形態の上より、之を左の十種に分つ。
而してその各を品詞といふ。

- 名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 接續詞
- 感動詞 助動詞 助詞

第二章 名詞

- (一) 豊臣秀吉朝鮮を征す。
 - (二) 父母の恩は山よりも高し。
 - (三) 日本の國花は櫻である。
 - (四) 儉約は美德である。
- 右の例にて、傍線を施せる語は皆事物の名をあらはせり。

名詞

かゝる語を名詞といふ。

練習一

練習

一、次の文中の名詞を指摘せよ。

- (イ) 劉備は深く孔明に信頼し、一々其の言を用ひたり。
- (ロ) 養老瀧は孝子の傳説を以て其の名、天下に高し。
- (ハ) 花の雲鐘は上野か、淺草か。
- (ニ) 廉潔質素、克己忍耐の氣性を鍛鍊せねばならぬ。
- (ホ) 日本の景色では、丹後の天の橋立がよい。

二、名詞の定義を下せ。

第三章 數 詞

數詞

(一) 十を聞いて十を知る。
 (二) 一寸の蟲にも五分の魂。
 (三) 鉛筆一ダースの價五拾錢なり。
 (四) 太郎は三ノ組の第二番である。(口)
 (五) 六七合目以上は、空氣が稀薄であるから、人の呼吸數は、下界の二倍となる。(口)

右の例にて、十、一寸、五分、一ダース、五拾錢、二倍は事物の數量をあらはし、三ノ組、第二番、六七合目は物の順序をあらはせり。かくの如く事物の數量又は順序をあらはす語を數詞といふ。

練習二

練習

一、次の文中の數詞を指摘せよ。

- (イ) あの角から三軒目が僕の家です。
- (ロ) リンカーンは、西曆一千八百九年二月十二日、ケンタッキー州の片田舎で呱呱の聲を擧げた。
- (ハ) 二十に五を加ふれば、答二十五となる。
- (ニ) 綴字書、算術書、文法書の三書を一章、一句も残さず、悉く諳記するやうになれり。
- (ホ) こゝにマッチ一はこと提灯二はりと蠟燭が二本あります

二、數詞の定義を下せ。

第四章 代名詞

代名詞

(一) 予は昨日かれを病院に見舞ひき。
 (二) こはわれの知る所にあらず。
 (三) 汝は誰ぞそを何處にか負ひて行く。
 (四) ここからあそこまではそんなに遠くはない。(口)
 (五) 農夫は山のあなたへ歸りたり。

右の例にて、傍線を施せる語は皆名詞の代りに用ひられたり。かゝる語を**代名詞**といふ。

又右の例中、予、かれ、われ、汝、誰は人の名の代りに用ひられたれば**人代名詞**といひ、こ、そ、何處、ここ、あそこ、あなたは事物、場所、方向を示せるものなれば、**指示代名詞**といふ。代名詞を

表示すれば左の如し。

人代名詞

自稱(第一人稱)	對稱(第二人稱)	他稱(第三人稱)	不定稱
(文) われ	(文) なれ	(文) かれ	(文) たれ
(口) わたし	(口) おまへ	(口) あれ	(口) だれ
予	汝		たれ
僕	君	あのおかた	なにがし
拙者	貴君	あれ	ぞのおかた
わらは(女)	御許(女)		

指示代名詞

種類	近		中		遠		不定
	文	口	文	口	文	口	
事物	これ	これ	それ	それ	かれ あれ	あれ	なに いづれ どれ
場所	ここ	ここ	そこ	そこ	あそこ あしこ かしこ	あそこ あすこ	いづこ いづく
方向	こち こなた	こつち こちら	そち そなた	そつち そちら	あち あなた かなた	あつち あちら	いづち いづかた ごちち ごちら

練習三

練習

○代名詞の複数をあらはすには**疊語**を用ふるか若くは「ら」
「ごも」を添ふ。

疊語にて複数をあらはせるものは

われわれ たれたれ なになに これこれ

らごもを添へたるものは

われら 汝ら 彼れら それら たれども

一、次の文中の代名詞を指摘しその種類及び稱を答へ

よ。

(イ)これは僕の本ですそれはあなたの筆です。

(ロ)農夫はあの山のこなたを通つてあの川のあちらに行つた。

- (ハ) 余はそれよりもこれを好む。
- (ニ) こゝは南門の跡、そこは金堂の跡、かしこは法華堂の跡、見まはせば、いづこも懷舊の種ならぬはなし。
- (ホ) 我、汝のことを彼につげん。
- (ヘ) 彼處に一村、此處に一村、牧童漁翁が煙を掲ぐるばかりの片田舎なりき。

二、代名詞の定義を下せ。

第五章 動詞

- (一) 本を讀み、又字を習ふ。
- (二) 胡蝶三つ二つ、遠く去り、また近く来る。
- (三) 朝早く起きる。 (ロ)

動詞

練習四

(四) かなたに洋々たる大河あり。
右の例にて讀み、習ふ、去り、来る、起きるは事物の動作を、ありは存在を表せり。かゝる語を動詞といふ。

練習

一、左の文中の動詞を摘出せよ。

- (イ) 一もと柳の垂れたるかげに、床几ならべて團子を賣る。腰かけて煙ふく客あり。すゝぶりたる釜の下焚きつくるは主の老婆なり。
- (ロ) 敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花。
- (ハ) 見渡せば眺むれば見れば須磨の秋。
- (ニ) 表忠塔を背に、山頂を北へ歩いて鳥居をくぐり、石段を上り、納骨祠に詣でる。

二、動詞の定義を下せ。

第六章 形容詞

- (一) 彼の行は甚だ正し。
- (二) 松青く砂白し。
- (三) かしこに高い山が聳え、こゝに長い川が流れてゐる。

(口)

形容詞

右の例にて傍線を施せる語は事物の性質若くは状態をあらはせり。かゝる語を形容詞といふ。

練習五

練習

一、左の文中の形容詞を指摘せよ。

- (イ) 語淺くして意深し。
- (ロ) 米に交れば赤くなり、麻の中の蓬は扶どすして自ら直し。

- (ハ) 帯に短く褌に長し。
- (ニ) めざましい手柄を立ててはなぐしい死を遂げよ。
- (ホ) 松青く樓門赤く、茶煙たえぐに上りて花極めて白し。

第七章 副詞

- (一) 潮次第に満ち、川さかさまに流る。
- (二) 風甚だ寒し。

右の例の中なる(一)の次第には動詞満ち、さかしまには動詞流る、しめやかにには動詞降るの意義を限定し、(二)の甚だは形容詞寒し、最もは形容詞美しの意義を限定す。かくの如き

語を副詞といふ。

(三) 彼はいと速に走る。

や、暫く考へ居たり。

右の例の中なるいとは副詞速に、やは副詞暫くに添ひて、それもその意義を限定せり。かくの如く副詞は又他の副詞にも添ふことあり。

副詞は動詞・形容詞或は他の副詞に添ひてその意義を限定する語なり。

副詞

練習六

練習

一次の文中の副詞を指摘し、且つその副詞がいづれの語を限定せるかを説明せよ。

(イ) 我はしばしば彼を訪へども、彼は未だ我が家に來らず。

(ロ) 夜も最早明けたるにや、人聲かすかに耳に入る。

(ハ) 一島未だ去らざるに、一島更に現れ、水路窮るが如くして、また忽ち開く。

(ニ) われ豈これを知らざらんや。

(ホ) 彼は最もまじめに仕事を勉む。

(ヘ) わづか三里の道であるが、よほど急に傾斜してゐる。

(ト) 春風緩かに來りて、奉納の旗をびらりと吹く。

(チ) 汽車の窓より見れば、朝日花やかにさし上る。いと心地よし。

二、副詞の定義を下せ。

第八章 接續詞

(一) 國語、英語及び數學の三科を學ぶ。

接續詞

(一) 文を學び且つ武を習ふ。
 (二) 春は來りぬ。されど鶯は未だ鳴かず。
 (三) 右の例にて及び、且つ、されどは上下の語句文章を接續する
 ために用ひらる。かゝる語を接續詞といふ。

練習七

練習

一、次の文中の接續詞を指摘せよ。

- (イ) いしくも言ひける嬉しさよ。さりながら父と一緒に討死するこ
と忠義の道に叶はず。
- (ロ) いま少し遠くに行つて見ようか。併し吾が脚では五町とは走れ
ぬ。
- (ハ) 富士は水彩もて作れる畫の如く、窓の右に立ち、又左にあらはる。
- (ニ) 秋立ちたり、故に風涼し。

(ホ) 明日の試験にはペン、或は毛筆を持参すべし。
 (ヘ) 弊屋一同無事消光罷在り候間、他事ながら御安神下されたく候。
 二、次の接續詞を用ひて文を作れ。
 但し。 然れども。 はた。 ところが。 或は。
 三、接續詞の定義を下せ。

第九章 感動詞

- (一) あゝ、哀しい哉。
- (二) さて、残念なことをしました。(ロ)
- (三) いざ、月見に行かむ。
- (四) あはれ、太閤世を去りて、よつぎの主は幼し。
- (五) おや、たいへんなことになりました。(ロ)

感動詞

右の例にて傍線を施せる語はいづれも感動したる時に發する語なり。かゝる語を感動詞といふ。

練習八

練習

一、左の文中にある感動詞を摘出せよ。

- (イ) やよ待て。
- (ロ) いでや目にも物見せてくれうす。
- (ハ) おやお珍らしいこと。
- (ニ) あはれ波の音と松風とのみぞ今も昔にかはらざりける。
- (ホ) まあ、何といふ明るい快い感じを持つた社殿だらう。

第十章 助動詞

- (一) よく勉め、又よく遊ぶべし。

2. 5. 13

助動詞

(二) 明日は雨降らむ。

(三) 枝々星を帯びたり。

(四) 僕は朝早く學校に出かけて往つた。(ロ)

右の例にて、べし、む、たり、及びたは何れも動詞に添ひて其の意義を助く。かゝる語を助動詞といふ。

- (一) 東京は我が國の首都たり。
- (二) 級中第一の勉強家は彼なり。
- (三) 四と五との積は二十なり。
- (四) 花の美しきなり。

右の如く助動詞には名詞・代名詞・數詞・形容詞に添ふものもあり。

- (一) 大に勉強せざるべからず。

(二) 牧童漁翁が煙を揚ぐるばかりの片田舎なりき。
右の如く助動詞は又他の助動詞に添ふことあり。

練習九

練習

一、左の文中より助動詞を摘出せよ。

(イ) 己に恥ぢざる工夫をなすべし。

(ロ) 遭難地に急行せしめたり。

(ハ) 人に車を押させる。

(ニ) 夜のとばりは全く馬主の行方をかくした。

(ホ) 一日に十里の道を歩まる。

(ヘ) 明日公園に遊ばん。

(ト) 思はず大聲をあげて泣號びぬ。

二、助動詞の定義を下せ。

第十一章 助詞

助詞

- (一) 鳥が鳴く。
 - (二) 花を嵐山に観る。
 - (三) 人にして鳥にだに如かず。
 - (四) 彼は年なほ若けれども力強し。
 - (五) 行ける所まで行かう。
- (ロ)
- 右の例のが、を、に、にして、に、だに、は、ども、まで、は種々の語につきて、その語に意義を添へ、又は他の語との關係をあらはせり。かゝる語を助詞といふ。
- 助詞は又テニヲハともいふ。
- 助詞には種類甚だ多し。今左にこれを擧げん。

一、名詞・數詞・代名詞につゞく助詞

の・が・と・を・に・へ・から・より・まで。

二、動詞・形容詞・助動詞につゞく助詞

ば・とも・ご・ども・も・に・を・が・て・で・つ・つ・ながら。

三、種々の品詞につゞく助詞

は・も・ぞ・なん・や・か・こそ・ばかり・のみ・だに・すら・さへ。

練習一〇

練習

一、左の文中の助詞を摘出せよ。

(イ) なぎさの松に吹く風をいみじき樂と我は聞く。

(ロ) 大將は怒つて三千圓の金を地に投げつけた。

(ハ) 君が代は千代に八千代にさゝれ石のいはほとなりて苔のむすま
で。

體言用言

以上説き來れる中、名詞・數詞・代名詞を體言といひ、動詞・形容
詞助動詞を用言といふ。

練習一一

練習

左の文章を品詞に分類せよ。

(イ) 天は清く晴れたれども、脚下は薄黒き雲の波、一面にはびこれり。

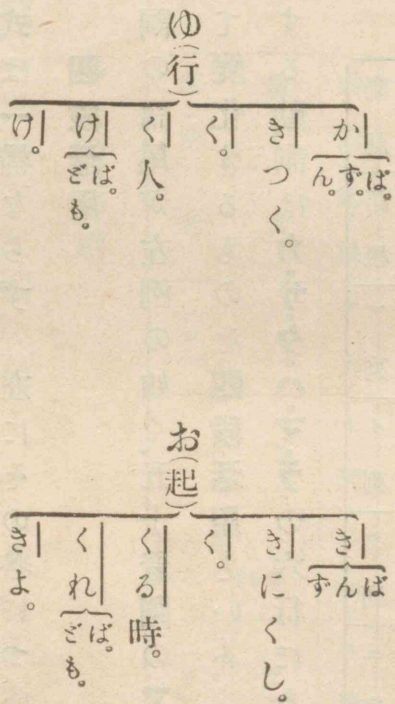
その雲、綿の如し。見る見る、東の方、ばつとあかく紫となり、薄紅と
なり、遂に深紅色となる。

- (ロ) 皇太子殿下から私のまづ受けた第一印象は、その御聰明に渡らせられ、眞に、帝王の御資質を備へて居らせらるる事である。
- (ハ) すきこそ物の上手なれ。
- (ニ) 問ふに落ちずして、語るに落つ。

動詞の活用

單語篇(下)

第一章 動詞の活用



動詞は右の如く變化せざる部分と變化する部分とを有す。その變化せざる部分を語根といひ、變化する部分を語尾と

四段活用

いひ、その變化することを活用といふ。動詞の活用は必ず五十音圖の一行内に於てすれども、その形式は一樣ならず。左にその各について説明せん。

一 四段活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のアイウエの四段に亘りて變化するものを四段活用といふ。而してこの活用に屬する動詞はカ・サ・タ・ハ・マ・ラの六行にあり。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
書く	書 ^カ	か	き	く	け	(こ)
押す	押 ^オ	さ	し	す	せ	(っ)

上二段活用

二 上二段活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のイウの二段に亘りて活用し、且つウ列に^レの添はれるものを上二段活用といふ。而してこの活用に屬する動詞はカ・タ・ハ・マ・ヤ・ラの六行にあり。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
盡く	盡 ^ッ	(カ)	き	く ^レ	(ケ)	(コ)
老ゆ	老 ^オ	(ヤ)	い	ゆ ^レ	(エ)	(ヨ)

上一段活用

三 上一段活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音のイ列にのみ活用し、これに^レの添はれるものを上一段活用といふ。而してこの活用に屬する動詞はカ・ナ・ハ・マ・ヤ・ウの六行にあり。

16.5.13

下二段活用

煮る	着る	動詞
(煮 ^ニ)	(着 ^キ)	語根
(チ)	(カ)	ア列
ににに れる	ききき れる	イ列
(ヌ)	(ク)	ウ列
(ネ)	(ケ)	エ列
(ノ)	(コ)	オ列

四 下二段活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のウ・エの二段に亘りて活用し且つウ列に^レれ^ルの添はれるものを下二段活用といふ。而してこの活用に屬する動詞は全行にあり。

隔つ	受く	動詞
隔 ^マ	受 ^ウ	語根
(タ)	(カ)	ア列
(チ)	(キ)	イ列
つつつ れる	くくく れる	ウ列
て	け	エ列
(ト)	(コ)	オ列

下一段活用

五 下一段活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のエ列にのみ活用し、これに^レれ^ルの添はれるものを下一段活用といふ。而してこの活用に屬する動詞は力行に唯一語あるのみ。

蹴る	動詞
(蹴 ^キ)	語根
(カ)	ア列
(キ)	イ列
(ク)	ウ列
ける れる	エ列
(コ)	オ列

正格活用

以上五種の活用を正格活用といふ。

力行變格活用

六 力行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のイ・ウ・オの三段に亘りて活用し、且つウ列に^レれ^ルの添はりて活用するものは、たゞ「來」の一語あるのみなれば、これを力行變格活用といふ。

サ行變格活用

七 サ行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のイ・ウ・エの三段に亘りて活用し、且つウ列に^レれ^ルの添はりて活用するものは、たゞ「爲」の一語あるのみなれば、これをサ行變格活用といふ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
來	(來 ^ク)	(カ)	き	くる	(ケ)	こ

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
爲	(爲 ^ス)	(サ)	し	する	せ	(ソ)

猶すは他語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。

罪^ツす。 旅^{タビ}す。 ものす。 運動す。 辱^シくす。
審かにす。 講ず。 論ず。 等の如し。

ナ行變格活用

八 ナ行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のアイウエの四段に亘りて活用し、且つウ列に^レれ^ルの添はりて活用するものは、たゞ「死ぬ」「往^ユぬ」の二語あるのみなれば、これをナ行變格活用といふ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
死ぬ	死 ^シ	な	に	ぬぬぬ れる	ね	(ノ)

ラ行變格活用

九 ラ行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のアイウエの四段に亘りて活用すること、なほ四段活用の如くなれども、イ列にて言ひ切らるゝものは、たゞ「有^ル」「居^ル」「侍^ル」の三語あるのみ

なればこれを「**ラ行**變格活用」といふ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
有り	有 ^ア	ら	り	る	れ	(ロ)

猶、高かり・美しかりの如く形容詞の連用形高く・美しくにこの動詞ありのつゞきて約められたるもの、及び明瞭なり・平然たりの如く副詞明瞭に・平然とに同じく動詞ありのつゞきて約められたるものも亦「**ラ行**變格活用」なり。

以上四種の活用を「**變格活用**」といふ。

二 動詞活用の識別法

以上述べたる正格變格九種の活用中、左の六種に屬する動詞はその數、極めて少なければ、悉くこれを「**諸記**」すべし。

變格活用

動詞活用の識別法

上一段活用 著る 煮る 似る 干る 見る(顧みる、惟みる)
(鑑みる、試みる) 射る 鑄る 居る 率ゐる

下一段活用 蹴る

カ行變格活用 來

サ行變格活用 爲(この外信ず、勉強すの類)

ナ行變格活用 死ぬ 往ぬ

ラ行變格活用 有り 居り 侍り(この外善かり、明かなり、快然たりの類)

○四段・上二段・下二段の三活用に屬する動詞は、その數甚だ多ければ左の識別法によりてこれを知るべし。

一、「**讀まず**」「**書かず**」の如く打消の**ず**がア列の音につゞくものは「**四段活用**」なり。

二、「**落ちず**」「**悔いず**」の如く打消の**ず**がイ列の音につゞく

ものは上二段活用なり。

三「榮えず」「兼ねず」の如く打消のずがエ列の音につゞくものは下二段活用なり。

なほ四段活用はカサタハマラの六行に活用すれば、其の語尾の假名を誤ることはなけれども、上二段活用に於ては八行とヤ行との語尾の假名を誤ることあれば、左の如く心得おくべし。

ヤ行上二段活用の動詞は老ゆ・悔ゆ・報ゆの三語あるのみにして、他はすべて八行なり。

又下二段活用に於てはア行・ハ行・ヤ行・ワ行の間に混雜を來すことあり。されば大體左の如く心得おくべし。

ア行下二段活用 得の一語のみ。

ワ行下二段活用

植う・飢う・据うの三語のみ。

ヤ行下二段活用

甘ゆ 嘶ゆ 癒ゆ 覺ゆ

一 聞ゆ おもほゆ 消ゆ 凍ゆ 越ゆ

榮ゆ 牙ゆ 戯ゆ(そばふとも) 聳ゆ

絶ゆ 費ゆ 潰ゆ 痿ゆ 生ゆ

映ゆ 冷ゆ 殖ゆ 吠ゆ まみゆ

見ゆ 悶ゆ 燃ゆ 萌ゆ

(以上は普通に用ふるもの)

以上の外はすべて八行下二段活用なりと知るべし。

習練二二

練習

一、左の文中より動詞を抽出してその活用を示せ。

- (イ) 頭熱して眠られず、起きて庭を歩むに、樹梢を漏れ来る月の光碧にして、蟲聲雨の如く四方に聞ゆ。
- (ロ) 不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。
- (ハ) スバルタ武士は死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つるを以て無上の名譽とせり。

- (ニ) 五月雨に四尺伸びたる竹の、手水鉢の上に蔽ひ重なりて、餘れる一本は高く軒に逼れば、風誘ふたびに戸袋をすつて、縁の上にもはら／＼と所擇ばず、縁を滴らす。

二、左の動詞の活用を類別せよ。

- 強ふ。老ゆ。委す。立身す。煮る。居り。死ぬ。死す。弑す。植う。用ふ。打つ。朽つ。亡ぶ。信ず。撫づ。照す。懸く。碎く。

解く。亂る。

三、左の文中の動詞の活用に誤あらば正せ。

- (イ) 彼の勤勉誠に感づるに餘りあり。
- (ロ) 落武者、薄の穂に怖す。
- (ハ) 汝に出するものは汝にかへる。
- (ニ) 恥なきを恥すれば恥なし。
- (ホ) 困難に堪えて、絶へず努むる者は必ず成功すべし。
- (ヘ) 鷹は飢ゆとも穂はつまず。

動詞の活用形

第二章 動詞の活用形

(別表参照)

動詞はその語尾活用して、種々の形に變ずるものなることは已にこれを説明したり。而してこれ等の語形をその用法によりて左の六つに分類することを得。

未然形

一、書を讀^まむ^ば。

早く起^きま^す。

着物を着^はむ^ば。

運動せ^せむ^ば。

右は多く「ばむん」などに連りて、動作の未だ成立せぬ意をあらはすに用ふる形なれば、これを未然形と名づく。

二、書を讀み始む。

早く起きにくし。

着物を着飾る。

運動し易し。

右は多く用言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連用形と名づく。

なほ此の形は動作のつゞきて起る時、前の動作をいひさす形となり、又云ひするて名詞となすことあり。
書を讀み、字を習ふ。

連用形
連言
作言

27.6.13

終止形

文字の讀みを習ふ。

(霞、露、光、水、扇、舞、取扱など皆これなり)

三、書を讀む。

早く起く。

着物を着る。

よく運動す。

右は多く文を終止するに用ふる形なれば、これを終止形と名づく。

なほこの形が動詞の本體なれば、或動詞を擧ぐる時は、常に終止形を示すものと知るべし。

四、書を讀む人。

朝早く起くる時。

着物を着る人。

運動する時。

右は多く名詞・代名詞即ち體言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連體形と名づく。

五、書を讀め。

朝早く起くれ。

どどば。

どどば。

命令形

着物を着れば ども

運動すれば ども

右は多く「ば」「ど」「ども」などに連りて動作の已に成立せる意をあらはすに用ふる形なれば、これを**已然形**と名づく。

六、流暢に讀め。

早く起きよ。

着物を着よ。

よく運動せよ。

右は命令の意をあらはすに用ふる形なれば、これを**命令形**と名づく。

練習一三

練習

一、動詞の活用形の名稱を述べよ。

二、命令形によを添ふるものと、然らざるものとを舉げよ。

三、左の動詞を活用によりて類別し、その六つの活用形を表示せよ。

- | | | | |
|---------|---------|---------------------------|----------|
| (イ) 歌ふ。 | (ロ) 棄つ。 | (ハ) 恥 <small>へ</small> 。 | (ニ) 要求す。 |
| (ホ) 似る。 | (ヘ) 榮ゆ。 | (ト) 得。 | (チ) 治む。 |
| (リ) 釣る。 | (ヌ) 老ゆ。 | (ル) 据 <small>ス</small> う。 | (ヲ) 辨ず。 |
| (ワ) 有り。 | (カ) 干る。 | (ヨ) 惟みる。 | |

四、次の文中の動詞の活用の種類及び活用形の名を示せ。

- (イ) 歲月は人を待たずといふ。
- (ロ) 恩を受けば必ず報いよ。
- (ハ) 針となさんどて磨するなりと答へき。
- (ニ) 色々にこしらへいへと更に受けずして歸らんとす。
- (ホ) 白く立つ煙黒く飛ぶ鳥。見渡せば、秋はまた都の空にも宿りかつ

遊ぶ。

(へ)それ、身都門の中に生活し、而して身體を強固にし精神を旺盛ならしめんことは、時に郊外に散策して自然の壯觀を眺め、以てその心身を養ふに在り。

(ト)常に良き著述に親しむものは、只獨り居れども、寂しきことを覺えず。

五、次の文中に動詞の活用形の誤れるものあらば正せ。

(イ) 負ひたる傷より流る血しほ拭ひもあへず。

(ロ) 房總二州の山々は霞に消えて視るども見えす。

(ハ) 棄てる神あれば助ける神あり。

(ニ) 余の記さんとする所はその風致にあり。

(ホ) 世には無爲無能にして、その父母の恩に報ゆこと能はざるものあり。

(へ) 日の暮るを待ちて檐の岐阜提灯に火を點づ。

口語の動詞

第三章 口語の動詞

口語動詞の活用

一、四段活用

語根	語形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
有		らッ	りマス	る	る時	れ ドバ	れ
死		なッ	にマス	ぬ	ぬ人	ね ドバ	ね
書		かッ	きマス	く	く人	け ドバ	け

上二段活用

右の表の如く口語にてはナ變ヲ變ともに四段活用となる。

二、上一段活用

語根	語形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
起		きナイ	きニクイ	きる	きる時	きれ ドバ	きよ(ろ)
(見)		みナイ	みニクイ	みる	みる人	みれ ドバ	みよ(ろ)

下二段活用

右の表の如く、上二段・上一段は口語にては共に上一段活用となる。

三、下一段活用

語根	語形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(蹴)	蹴	け	け	ける	ける時	けれ	けよ(ろ)
褒	褒	め	め	める	める人	めれ	めよ(ろ)
		ナイ	ソ			バ	

右の表の如く下二段・下一段は口語にては共に下一段活用となる。

四、力行變格活用

語根	語形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(來)	來	こ	き	くる	くる人	くれ	こい
		ナイ	マ			バ	

右の表の如く、口語にては終止形及び命令形に文語と異なる點あり。

カ變

サ變

五、サ行變格活用

語根	語形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(爲)	爲	せ	し	する	する時	すれ	しろ
		ナイ	ク			バ	よ

右の表の如く口語にては未然形・終止形及び命令形に文語と異なる點あり。

以上の如く口語動詞の活用は四段・上一段・下一段・カ變・サ變の五種に減ず。

練習一四

練習

一次の文中の動詞の活用及び活用形を問ふ。

(1) いよ／＼汗の流れる夏が来る。

- (ロ) しようど決心すれば、きつと出来る。
- (ハ) 猿も木から落ちることがある。
- (ニ) 怨に報いるに徳を以てするといふこともある。
- (ホ) 恥ぢることを知らないものは、自ら身を辱めるものである。

二、次の口語動詞を活用せしめて、六つの語形を作れ。

- 吠える。 朽ちる。 飢える。 閉ぢる。 老いる。 留める。
- 死ぬ。 垂れる。 信ずる。 榮える。

第四章 形容詞の活用

形容詞にも活用あり。されど其の活用は五十音圖の同一行の間に行はるるにあらで、力行サ行の兩行に跨りて活用するものなり。而して其の活用に二種ありク活用とシク活用とこれなり。

「清し」

水清くば大魚すまじ。

水清くとも大魚すまむ。

水清く流る。

水清し。

水清き池あり。

水清ければ大魚すまず。

水清けれども大魚すむ。

「美し」

花美しくば香も亦よからむ。

花美しくとも毒あらむ。

花美しく咲く。

この花甚だ美し。

美しき花咲けり。

この花美しければ君に與へむ。

この花美しけれども毒あり。

形容詞活用形の特徴は命令形の存せぬことと未然形に「とも」といふ助詞のつづくこととの二つなり。

右の「清し」の如く活用するをク活用、形容詞といひ、「美し」の如く活用するをシク活用、形容詞といふ。今これを表示

すれば左の如し。

形容詞活用表

活用	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ク活用	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	美	シク	シク	シ	シキ	シケレ

連用形は副詞に轉ずる語形なれば、又副詞形ともいふ。

口語の形容詞の活用形は左の如し。

活用	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ク活用	清	ク	ク(ウ)	イ	イ	ケレ
シク活用	美	シク	シク(ウ)	シイ	シイ	シケレ

右のうち連用形は關東にては「ク」の形を用ひ、關西にては「ウ」の形多し。「シク」活用の終止形に「イ」を加ふるは口語形容詞の特色なり。又「ケレ」の形は口語

口語の形容詞

形容詞活用表

練習一五

練習

にては已然未然の差なくただ條件を示すに止まるなり。

一、左の文中の形容詞を抽出し、且つその何形の語形に表れ居るかを説明せよ。

- (イ) 雪やみて日出でたれど底寒きこと甚だしく北風終日膚を刺す。
- (ロ) 森戸の川を渡るに、一岬松深く風情優しき所に明神の祠あり。岩礁漸く繁し。
- (ハ) 雨も好し、露も好し、霞も霽も天より降るものの面白からぬは無きが中に雪はまた特にめでたし。
- (ニ) 兩方の手平を高く立てて、雪の如き真白い腹を出して碧い海に一文字。
- (ホ) 朝夕は凌ぎ易けれど、日中は堪へ難し。
- (ヘ) 遠き慮なければ必ず近き憂あり。

二、左の形容詞を活用せしめて、その五つの語形を表に
作れ。

痛し。 羨し。 勇し。 著し。 辛し。 見にくし。 尊い
貧しい。

第五章 音便

動詞の音便

動詞の音便

動詞の連用形よりてたりたに連なる時、その語尾が發音の便宜上他の音に轉ずることあり。これを動詞の音便といひ、その文字をも書き改めざるべからず。
動詞の音便に左の四種あり。

イ音便

一、イ音便

きぎの音のいに轉ずるもの。

説いて(文語)(口語)

説いた(口語)

説いたり(口語)

泳いで(文語)(口語)

泳いだ(口語)

泳いだり(口語)

○「指して」が「指いて」となるやうに、稀に「し」が「い」に轉ずることもあり。

ウ音便

二、ウ音便

ひの音のうに轉ずるもの。

買うて(文語)(口語)

買うた(口語)

買うたり(口語)

三、撥音便

に・び・みの撥音んに轉ずるもの。

死んで(文語)(口語)

死んだ(口語)

死んだり(口語)

學んで(文語)(口語)

學んだ(口語)

學んだり(口語)

促音便

飲み。飲ん。だ(口語)
飲ん。だり(口語)

四、促音便 ち。ひ。りの促音つに轉ずるもの。

勝ち。勝つ。た(口語)
勝つ。たり(口語)

買ひ。買つ。た(口語)
買つ。たり(口語)

釣り。釣つ。た(口語)
釣つ。たり(口語)

形容詞の音便

形容詞の音便

一、イ音便 きのいに轉ずるもの。

イ音便

善き。哉 善い。哉

美しき。花 美しい。花

二、ウ音便 くのうに轉ずるもの。

暑くなる 暑うなる

深く。て 深く。て

○又、形容詞の連用形より轉じたる副詞がサ行變格の「す」と合して熟語の動詞となる時に、その語尾のくが

ウ音便若くば撥音便を起すことあり。

ウ音便 全く。す 全う。す

撥音便 軽く。す 軽ん。ず

練習一六

練習

一、左の文中の動詞・形容詞の音便を指摘してその原音を
示せ。

- (イ) 休暇中に舊師を訪^うて小學校時代を偲^{おぼ}ぶ。
- (ロ) その程々に従^{したが}つて祈^{いの}らぬ神佛もなく立てぬ願^{ねが}ひもなし。
- (ハ) 振返^{かえ}つて見ると神殿のあたりはすつかり深い藪^{くさ}に包^かまれて、黒々と晝でも暗^くい程生^{せい}ひ茂^さつてゐる樹林の中を、かつきりと切り開^{ひら}いたやうに、路線の白い色が暮^ゆれ残^{のこ}つて續^ついて見えるのが、妙に嚴肅な氣分^{きぶん}を起^{おこ}させた。
- (ニ) 旅^{たび}に病^やんで夢^{ゆめ}は枯野^{この}をかけ廻^{まわ}る。

二、左の文の誤^{あや}を正^{ただ}し、且つその理由^{りゆう}を述^のべよ。

- (イ) 飛^とむで火^かに入る夏^{なつ}の蟲^{むし}。
- (ロ) 野道^{のち}に迷^{まよ}ふて彷徨^{たふ}する。
- (ハ) 仰^{あや}みで天^{あま}に恥^はじす。

受身

一 受身の助動詞

- (一) 犬^{いぬ}、人^{ひと}に打^うたる。
- (二) 犬^{いぬ}、人^{ひと}に蹴^くらる。

第六章 助動詞の種類及活用

(別表参照)

- (一) 大阪は甚だ賑^{にぎ}しひ都^{みやこ}である。
- (ホ) 溪^{たに}に沿^{したが}ふて進^{すす}めば、山高^{やまたか}く聳^{そび}へ、水清^{みづきよ}ふ流^{なが}れて塵外^{ちんがい}の趣^{おもむ}あり。
- (ヘ) 大^{おほ}に人意^{にいつ}を強^{つよ}ふするに足^{たり}る。
- (ト) 思^{おも}ふた程^{ほど}苦^{くる}しひこともなひやうだ。
- (チ) 任^{まか}重^{おも}ふして負^お荷^しに堪^たえず。
- (リ) 首尾^{しゆび}よふ卒業^{そつぎやく}せられておめでたふございます。
- (ヌ) 林檎^{りんご}食^たふて牡丹^{ぼたん}の前^{まへ}に死^しなん哉^や。

活用形の名稱
は動詞のそれ
と同じ

右のるは他より動作を受くる意をあらはす。これを
受身の助動詞といふ。

る れ る る る れ よ
(下二段活用に同じ)

口語にはれるといふ助動詞あり。
犬が人に打たれる。 犬が人に蹴られる。

可能

二 可能の助動詞

(一) 一日に十里の道を行かる。
(二) 六尺の屏風も飛び越えらる。
(三) 腰間の秋水、鐵をも斷つべし。
(四) その勢あたるべからず。
右のるらるべしべからずはその動作を成し得る意をあらは

す。これを**可能の助動詞**といふ。るらるは活用全く受身
の助動詞と同じ。

べし く く し き けれ (形容詞に同じ)
べかり ら り り

口語にはれるられるといふ助動詞あり。
一日に十里の道を行かれる。
六尺の屏風も飛び越えられる。

自然的可能

(一) 内は口語

●可能の助動詞は又轉じて動作が自然に起りて止められ
ぬ意をあらはすことあり。これを**自然的可能**といふ。
亡き友の事のみ思はる。(思はれる)
たゞ夢とのみ考へらる。(考へられる)

三 使役の助動詞

使役

- (一) 生徒に字を書かす。
- (二) 大工に家を建てさす。
- (三) 下男に田を耕さしむ。

右のすさすしむは他をして動作をなさしむる意をあらはす。之を**使役の助動詞**といふ。

す せ せす する すれ せよ
 (さす) せ せす する すれ せよ
 (しむ) め め む むる むれ めよ
 (下二段活用に同じ)

口語にはせるさせるといふ助動詞あり。

生徒に字を書かせる。

大工に家を建てさせる。

四 被役(使役)の受身の助動詞

被役

- (一) 生徒、先生に字を書かせらる。
- (二) 太工、主人に家を建てさせらる。
- (三) 下男、主人に田を耕さしめらる。

右のせらるさせらるしめらるは他に使役せらるる意をあらはす。之を**被役の助動詞**といふ。その活用は受身のらるに同じ。

口語にはせられるさせられるといふ助動詞あり。

生徒先生に字を書かせられる。

大工、主人に家を建てさせられる。

五 崇敬の助動詞

崇敬

- (一) 父は謠曲を好まる。
- (二) 校長は毎年上京せらる。

例
孝子人の答あらう (夏見)
わかれこの間字はらう (可也)
人孝子を答む (動詞)

- (三) 主上都を出で立たす。
 - (四) 御元服も院にてせさす。
 - (五) おほやけも屢行幸せしめ給ふ。
 - (六) 殿下式場に臨ませらる。
 - (七) 侍臣を差遣せさせらる。
 - (八) 皇太子御位に即かしめらる。
 - (九) 攝政宮殿下北海道に行啓せさせ給ふ。
 - (一〇) 春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。
- 右のるらるすさすしむは他の動作を敬ふ意をあらはす。
之を崇敬の助動詞といふ。

口語にはれるられるせられるさせられるを用ふ。
父は謠曲を好まれる。

時

完了

六 時の助動詞

殿下は式場に臨ませられる。

(1) 完了の助動詞

- (一) 書を讀み
たりぬつ
- (二) 書を讀めり。

右のつぬたりりは動作の完了せる意をあらはす。これを完了の助動詞といふ。

- つ てる つる つれてよ (下二段に同じ)
- ぬ ぬにぬぬぬね (ナ變に同じ)
- たり たりりりるれ (ラ變に類す)
- り (ら) (り) りるれ

過去

(ロ) 過去の助動詞

- (一) 花、散りき。
- (二) 花、散りけり。

右のきけりは動作の既に過ぎ去りし意をあらはす。これを過去の助動詞といふ。その活用左の如し。

き ○ ○ き し しか ○ (特殊活用)

(けり) (ら) (り) る れ ○ (ラ變に類す)

又きけりは更につぬたりりの連用形に添へて用ひらるることあり。但し、現代文にはあまり用ひられず。

- (一) 花、散りてき。
- (二) 花、散りてけり。
- (三) 花、散りにき。

きの終止形をしとすること許容せらる。けりは時として單に餘情を添ふる爲にのみ用ひらるることあり。和歌俳句に多し。

未來

(ハ) 未來の助動詞

- (一) 明日、空晴れむ(ん)

右のむは動作の未來に起る意をあらはす。これを未來の助動詞といふ。

む ○ ○ む む め ○ (特殊活用)

又むは更につぬたりりの未然形に添へて用ひらるることあり。但し現代文にはあまり用ひられず。

よ | う | 引 | た |

練習一七

練習

左の文中より受身・可能・使役・被役・崇敬・時の助動詞を指摘し且つ其の活用をいへ。

(イ) 勝海舟、若き頃西洋式の兵術を學びしが、常に良書の得がたきを歎

- (一) 花、散りてむ。
- (二) 花、散りなむ。
- (三) 花、散りたらむ。
- (四) 花、散れらむ。

口語には過去時にた、未來時にう、ようといふ助動詞あり。

花が散つた。

花が散らう。

明日は雨が霽れよう。

推量

七 推量の助動詞

- (一) 靜心なく花の散るらむ。
- (二) いつの頃なりけむ、確には覺えず。
- (三) 明日は雨降るべし。

と見え
せり。

(ロ) バリッシーはその父母甚だ貧しかりければ、更に學校の教育を受
けたることなかりき。

(ハ) 彼は篤志家に救はれ學資を給せられて勉學することを得、遂に學
界の泰斗と仰がるゝに至れり。

(ニ) 彼に取つて如何に苦戦であつたかは、之によつて察せられる。
(ホ) 囊中の文書は皆公岩倉具視公の塾居中に計畫せられて、玉松操と

いふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。
(ヘ) 明日の漢文をしらべようと本は出したがよく讀めない。

(四) 夜は未だ明くまじ。

(五) 來客あるらしければ面會せずして歸らむ。

右のらむは現在の動作を推量する意をあらはす。(現在推

量)

けむは過去の動作を推量する意をあらはす。(過去推

量)

べしは動作を指定して推量する意をあらはす。(指定

推量)

まじは動作を打消して推量する意をあらはす。(打消

推量)

らしはある根據ありて推量する意をあらはす。(根據

ある推量)

右の外、未來の助動詞むも亦推量の助動詞として用ひらるることあり。

明日は雨降らむ。

猶現代文には用ひられざれども、らし・めり・ましと云ふ推量の助動詞あり。

三吉野の山の白雪積るらし、ふる里寒くなりまさるなり。

立田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や絶えなむ。

山里に散りなましかば、櫻花匂ふさかりも知られざらまし。

推量の助動詞の活用は左の如し。

らむ

○

○

む

む

め

○

(特殊活用)

べしは命令にも用ひらる。古文に用ひられたるらしは活用なし。

(べ)し	く	く	し	き	けれ
(ま)じ	じく	じく	じ	じき	じけれ
(ら)し	しく	しく	し	しき	しけれ

(形容詞に同じ)

口語にはだらうたであらうまいらしいといふ助動詞あり。

- (一) 花が散るだらう。
- (二) いつの頃であつたであらう。
- (三) 明日は雨が降るだらう。
- (四) 夜はまだ明けまい。
- (五) 來客があるらしいから、面會しないで歸らう。

八 打消の助動詞

打消

- (一) 花、咲かず。
- (二) 予は出席せざりき。
- (三) 君はまだ遠くは行かじ。

右のずざりじは動作の起らざる意をあらはす。之を打消の助動詞といふ。そのうちじには稍推量の意あり。

ず ず ず ぬ ね ○ (特殊活用)

ざり ざり ざり ざり ざり ざり (ラ變に同じ)

じ 活用なし。

口語にはないぬといふ助動詞あり。

花が咲かない。(ぬ)

九 指定の助動詞

指定

- (一) かしこに見ゆるは我が家なり。
- (二) 花の散りくるなり。
- (三) 彼の性質は甚だよろしきなり。
- (四) 君、君たり、臣、臣たり。

右のなりは事物・動作・有様を、たりは事物を指し定むる意をあらはす。これを指定の助動詞といふ。

なり
たり

りりるれれ

(ラ變に同じ)

口語には體言の指定にだである、用言の指定にのであるのだといふ助動詞あり。

- (一) かしこに見えるのは我家(だである。)
- (二) 花の散り来る(のだ。のである。)
- (三) かれの性質は甚だよろしい(のだ。のである。)
- (四) 君は君(だである。)

二 咏嘆の助動詞

- (一) 汝と今や別るなり。
- (二) 秋の野に人待つ蟲の聲すなり。

咏嘆

右のなりは咏嘆の意をあらはす。これを咏嘆の助動詞といふ。

これを口語に譯するには多くわいといふ語を以てす。

二 比況の助動詞

- (一) 落花、雪の如し。
- (二) 歲月流るる(が)如し。

右の如しは比況の意をあらはす。これを比況の助動詞といふ。

ごとし

くくしき〇

(形容詞に類す)

口語にはやうだといふ助動詞あり。

落花が雪のやうだ。

歲月は流れるやうだ。

比況

希望

三 希望の助動詞

- (一) 東京に行きたし。
- (二) 月見に行かまほし。

右のたし・まほしは動作を希望する意をあらはす。これを希望の助動詞といふ。そのうちまほしは現代文には用ひられず。

たし	く	く	し	し	き	けれ
まほし	しく	しく	し	し	し	けれ

(形容詞に同じ)

口語にはたいといふ助動詞あり。
東京に行きたい。

練習一八

練習

一、左の文中より推量・打消・指定・咏嘆・比況・希望の助動詞

を指摘し、且つ其の活用形をいへ。

- (イ) 苟もこの國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰か此の光を仰がざるべき。
- (ロ) かなはじとや思ひけむ、太刀を捨てて逃げ失せたり。
- (ハ) 汝等は生徒たる本分を守るべし。
- (ニ) 冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。
- (ホ) 寢覺の枕に通ひ來なり。あなゆかしの鐘の音や。
- (ヘ) さりとともどかきやる浦の藻鹽草たがおりたちてかづきあぐらん。
- (ト) あ、誰が作りなしけむ自然の麗しさよ。
- (チ) 金剛石も磨かずば玉の光は添はざらむ。
- (リ) あはれ今年の秋もいぬめり。
- (ヌ) これ豈巍然たる大丈夫ならずや。

二、左の助動詞の活用を示せ。

す。 き。 む。 たり(時) けん。 さす。 如し。 たし。
まじ。

第七章 助動詞と動詞との接續

(別表参照)

一 未然形につづく助動詞

(イ) 受身(可能敬) する 四段活用・ナラ 變格活用
らる 上・下・二二段活用・カサ 變格活用

東京に行かる。 父に死なる。
先生に褒めらる。 よく勉強せらる。

(ロ) 使役崇敬 さす 上・下・二二段活用・カサ 變格活用
しむ 全動詞
す 四段活用・ナラ 變格活用

庭を掃かす。 君側に侍らす。

朝早く起きさす。 早く來さす。

書を讀ましむ。 着物を着しむ。

(ハ) 現在完了 ーり ーサ行變格活用

運動せり。

(ニ) 未來 ーむ 全動詞

雨、降らむ。 鞠を蹴む。

(ホ) 推量 ーまし 全動詞

春の心は長閑からまし。

(ヘ) 否定 じ ず 全動詞
ざり

字を書かず。 罪を受けじ。

勝つこと能はざりき。

(ト) 希望—まほし—全動詞

花見に行かまほし。

許容事項

(一)らるがサ行變格の動詞に結びつく場合に「罪サル」、「解釋サル」と用ふるも妨げなし。

(二)さすがサ行變格の動詞に結びつく場合に「手習サス」、「周旋サス」、「賣買サス」と用ふるも妨なし。

(三)得^{使役}シムア下、二未然形といふべき場合に「得セシム」と用ふるも妨なし。

口語

(イ)崇敬—サ行變格の動詞に結びつく場合、

學校長は東京に出張しられた。せられた。された。—多く用ひらる。

(ロ)使役—せる—四段活用。

させる—四段活用以外の動詞。

但、サ行變格活用に結びつく場合には「下女に掃除せさせる」と、やうに云ふべきなれども、サ變の語尾と助動詞「させる」の「さ」と約りて「させる」となる。

下女に掃除させる。

(ハ)未來—う—四段活用。

よう—四段活用以外の動詞。

(ニ)打消—ない—全動詞。

但、ないがサ行變格の動詞につづく場合には、その連用形よりす。少しも勉強しない。

二 連用形につづく助動詞

(イ)現在完了—つぬたり—全動詞

書きもらしつ。

日は暮れぬ。

全軍を率ゐたり。

(ロ) 過去
けり || 全動詞

人は死にき。

花、散りけり。

但、(一)きがカ、サ、變格活用の動詞につゞく場合に限り、左表の如き例外あり。

カ變	來 ^カ しか	未然形
サ變	爲 ^サ しか	連用形

(二)ぬはナ行變格の動詞につゞかず。

許容事項

ナ行四段活用の動詞を助動詞の「シ、シカ」に連ねて、「暮しい、時、過しい、か

ば」などいふ場合を「暮せし、時、過せし、かば」などとすることも妨なし。

(ハ) 推量 | けん || 全動詞

いつの頃より興りけん。

(ニ) 希望 | たし || 全動詞

博覽會を見たし。

いつ迄もここにありたし。

三 終止形につゞく助動詞

(イ) 推量
まし || 全動詞

らむ	べし	まし	めり	らし
----	----	----	----	----

靜心なく花の散るらむ。

朝早く起くべし。

雨降るまじ。

紅葉亂れて流るめり。

山の白雪積るらし。

(ロ) 可能―べかり 全動詞

一日に十里の道は行くべかりしに……………

(ハ) 咏嘆―なり 全動詞

汝と今や別るなり。

虫の聲すなり。

但、右の助動詞がラ行變格活用と結びつく場合にはその連體形よりす。

君側に侍るべし。 有るらし。

四 連體形につづく助動詞

(イ) 指定―なり 全動詞

夜は今、明くるなり。

但、なりは又體言の下にもつづく。

これは私の本なり。

指定のたりは用言の下にはつゝかすして體言の下にのみつづく。

されば用言の下のたりはすべて現在完了の助動詞なりと知るべし。

(ロ) 比況―如し 全動詞

但、助詞「が」を挟みて動詞・形容詞の連體形に添はること多し。

水の流るるが如し。

花の美しきが如し。

又、助詞「の」を挟みて名詞に添はることもあり。

海の面鏡の如し。

五 已然形につづく助動詞

(イ) 現在完了―り 四段活用に限る

書を讀めり。

字を書けり。

第八章 助動詞相互の接續

助動詞は數箇を併せ用ひて、種々複雑なる意義をあらはすことを得。而して其の接續には、各定まれる法則あり。即ち動詞の未然形に連るものは、助動詞にも亦その未然形に連り、其他連用形・終止形等皆動詞に連る場合と異なることなし。

○ 日夜奔走せ

終止形 しめ

連用形 られ

連用形 たり

終止形 き

○ らんべし、まじ、等の如く、ラ行變格活用動詞に限りてその連體形に連るものは助動詞に於ても、ラ行變格活用に等しき助動詞には、又その連體形に連るものと知るべし。

彼は既に中學校を卒業せしラ行變格活用なるべし。

練習一九

練習

一、次の文中の助動詞を指摘し、その接續法を述べよ。

- (イ) 建武中興の振はざりしは、當時の措紳にその人なかりしによれり。
- (ロ) 玉松操は一の偉大夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず。書を讀むを樂みとなし。夙に神武復古の説を抱きぬ。偶公に知られて蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策する所ありき。
- (ハ) 月天心をすぎて光華六合に瀰り、霜に澄める夜の氣は水まさるに凍らんと欲するが如くなる。身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えき。
- (ニ) 世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。
- (ホ) 遙に忘れたるこし方も、今更おもひだされて、消入るばかりなり。
- (ヘ) 春の色いたり、到らぬ里はあらし、咲ける咲かざる花の見ゆらむ。
(古今集)

(ト) 秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおごろかれぬ
る。(古今集)

(チ) 秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ。(古今集)

二、次の文に誤あらば正し、且つその理由を説明せよ。

(イ) 公園内に車を乗り入るるべからず。

(ロ) 年老めて元氣衰へり。

(ハ) 吾は終夜眠らずして考へり。

(ニ) 君は未だ東京を見まじ。

(ホ) 花の見えぬは霞の之を隔つなり。

(ヘ) その文章は余に讀まじ給へ。

(ト) 美しき衣服を着せしむ。

(チ) 齡長ける人は年少の者を勞るべし。

(リ) 我等は中等教育を受けり。

(ヌ) 此處に塵芥を捨つるべからず。

(ル) 人に笑はれまじとて努力しぬ。

(ヲ) 心を盡せしかどもつひに甲斐なかりき。

(ワ) 折角約束ししことも水泡に歸しぬ。

(カ) かの友は既に死にぬ。

(ヨ) 第一軍をして正面の敵を攻撃させたり。

(タ) 朝早く起きやう。

(レ) 僕が讀もふ。

三、動詞の未然形・連用形・終止形につゞく助動詞を列舉せよ。

四、指定のなりと咏嘆のなりとが動詞に接續する時、その接續の異りたる點をあげよ。

五、指定のたりと時のたりとが文中にある時、その接續上より見て、いかにこれを區別するか。

六、現在完了の「り」と動詞との接續法をのべよ。
七、過去の「き」「し」「しか」とカ・サ變格活用 of 動詞との接續法をのべよ。

第九章 助詞の用法

助詞には種々ありて、その用法も亦複雑なり。今その中に誤謬を生じ易きものについて其の用法を説明せん。

一 ぞなんこそ

舜、何人ぞ。 さる事は我は知らぬぞ。

右は文の終にぞを添へて、強く指し示す意を表せり。ぞが活用語につく時は、その連體形を受く。

五月待つ花たちはなの香をかげば昔の人の袖の香

北へ行く往をせしむる
つれづれこゝ、あはれ居る
下がへる、ふらふら
柳を人林を引引致の
整たりけり
春の夜をやみけ文た
柳の花をこそ見へわ
香かけ隠る

助詞

なん	<p>ぞする。</p> <p>奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき。</p> <p>夕涼みよくぞ男<small>に</small>生れける。</p> <p>右は文の中程にぞを添へたるものにて、かゝる場合には下は連體形を以て結ぶ定めなり。</p> <p>かく定かになん宿りはある。</p> <p>人と争はざるなん賢き。</p> <p>その人、貌よりは心なんまさりたる。</p> <p>右のなんもぞと同じく強く指し示す意を有する助詞にて、下は連體形にて結ぶ定めなり。</p> <p>物のあはれは秋こそまされ。</p>
こそ	

柔や柔ぞ待つてぬれぬ
今はととととと朝とととと
手とれ
① 杖風の隙に立てる白菊
は花川あつあつ川原のよす
るか。

か や

貌こそ美しけれ、心はむげに劣れり。
死なば一緒にこそともかくもならぬ。

右のこそはぞなんよりも一層強く指し示す意を有する助詞にて下は已然形にて結ぶ定めなり。

二 やか

かかることありやなしや。

かかることあるかなきか。

夜は静かに眠らるや。

夜は静かに眠らるるか。

霞か雲かはた雪か。

右は文の終にやかを添へて疑の意を表したるものにて、その活用語につく時はやは終止形をかは連體形を受くる定

めなれども、今はやも連體形を受くること多し。(許容事項参照)

花や咲きし。

誰かある。

右は文の中程にやかを添へて疑の意を表したるものにて、下は連體形にて結ぶ定めなり。

君は甲乙の中いづれを選ぶか。

五の三倍は幾何なるか。

右の如く上に疑の語ある時は、下にかを用ふる定めなれど、今はやを用ふることもあり。(許容事項参照)

誰かその悲惨に涙を流さざるべき。

其の時悔ゆとも甲斐あらんや。

かくてやは果つべき。

水鶏のたたくななど心細からぬかは。

反語

係結

右のや・かは反語の意をあらはす。而してかゝる場合に感動の助詞はを伴ひてやはか_ハはとして表るること多し。已に述べし如く、文の中程にぞ・なん・こそ・や・かあれば、下は連體形又は已然形にて結ぶ定めなり。これを係結の法則といふ。但し口語にはこの法存せず。

係語

結語

ぞ・なん・や・か

連體形

こそ

已然形

係結の法則は以上の如くなれども、若しその文が接續の用をなす助詞によりて下に續けらるる時は、その結びは表れずして、直に下文に接續す

珍しき春もあすとぞキコユルきこゆればくれなむ年を何か

惜しまむ。

淀川こそ洪水の害最もはげしきものなれば官廳の經營苦心を極めたり。

練習二〇

練習

一、次の文の係結につきて説明せよ。

- (イ) 一莖の草花にも人の工のえ企つまじき美しさぞこもれる。
- (ロ) 勉強に倦み給はん折は花こそこよなき慰めなれ。
- (ハ) 自ら春風に坐すといひけん心地のみこそせられしか。
- (ニ) 重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。
- (ホ) 偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。

二、次の文の係結に誤あらば正し、且つ其の理由を説明せよ。

- (イ) かの童ぞよく道を知ればつきて問はるべき。
- (ロ) 一命をなむ擲ちて君の馬前に斃れぬ。
- (ハ) この兒利根こそ生れ付きたらむ。
- (ニ) 東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力ぞ工なれ。
- (ホ) 貧家に生れたるぞ幸福なり」と古聖もいはれたる。
- (ヘ) 白きを見れば夜ぞ更けにけり。
- (ト) 一座感涙を流さぬものこそなかりける。

三 ば・とも・ども

明日雨降らば延期せむ。
 明日天氣よくば旅行せむ。
 今日雨降れば行かず。
 水、清ければ大魚棲まず。
 右の如くばが未然形に結びつく時は**假定・已然形**に結びつ

は
 石の清ければ大魚棲まず
 ニつら句を つたへてはけ
 大魚

の月見れば夕ぐれは
 かはけ

く時は**確定**の意味をあらはす。

口語にては左例の如く已然形にて**假定・確定**兩様の意をあらはす。

- 明日雨降れば延ばさう。
 水が清ければ魚が棲まない。
- 繪に書くと筆も及ばじ。
- 鳥の鳴かぬ日はありとも親を思はぬ日はあらじ。
- たとひ兵寡くともよもや敗るゝことはあらじ。
- 花、咲けども鶯未だ來鳴かず。
- この品好ければ買はず。

右の如くとともが動詞の終止形、形容詞の未然形に結びつく時は**假定・ども**が動詞、形容詞の已然形に結びつく時は**確定**の意をあらはす。(助動詞との結びつき方は動詞、形容詞に準じて之を知るべし。)

ども
 ども

現代文に於ては、誤解を生ぜざる限りに於て、ともどもの代りにもを用ふること許容せらる。(許容事項参照)

何等の事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備は未ダ成ラズ。

口語―ても、けれども、でも。

鳥の鳴かない日はあつても……………

品は好いけれども……………

茶は飲んでも……………

四と

並列のと

月と花と。

宗教と道德との關係。

京都と神戸と長崎とに行く。

事物を並列するときには、右の例の如くその一々の下にとを添ふる定めなれども誤解を生ぜざる時に限り最終の語句

の下に之を省くも妨なし。(許容事項参照)

但、左の如き場合には之を省くことを得ず。

史記と漢書との列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳とを讀むべし。

昨日、父と京都に行きさ。

世と推移る。

右のとは「と共に」の意味を有す。

北條時宗、幼名を太郎といふ。

あの川を澱川と呼ぶ。

右のとは動作の標準を示す。

月出づと見えて。

太平洋の夜は、今明けなんとす。

「と共に」のと

動作の標準を示すと。

上文を指示すると。

右のとは上文を指示す。
右の如くとが活用する語につく時は終止形を受くべき定めなれども、現代文に於ては連體形を受くることもあり。

(許容事項参照)

住よしの岸のひめ松人ならば幾世か經しと問はま
しものを。

ともにこそ花をも見めと待つ人の來ぬものゆゑに
惜しき春かな。

右はとがこそといふ係語に對する結語しめを受けたる
ものなれば、正しき用法なり。

五 だにすらさへ

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ

だに

かなしき。

鳥にだにしかず。

草木すら情あり。

行方すらも覺えず。

雨降り風さへ吹く。

涙をさへ落して喜びたり。

右の内だにすらは輕きをあげて重きを言外に思はしめ、さへはあるが上に更に添ひ加はる意の助詞なり。

口語にてはだにもすらもなく、さへが一般に用ひらる。

鳥にさへ及ばない。

行方さへも分らぬ。

六 なな……そ

決して怠るな。ゆめ忘るな。危き場所に居るな。

な

さへ

すら

右の如くなを動詞の終止形に添ふれば、その動作をすなと禁止する意を表す。但、ラ變の動詞に限りて、その連體形に添はる。

な……そ

かくなのたまひそ 深くな咎めそ

吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻花。

近く寄りて過なせそ

な……そはなと同じく禁止の意をあらはす。而してこの場合にそは動詞の連用形を受く。但、カ・サ變格の動詞に限り、その未然形を受く。

ばや

七 ばやなむ

繪を巧に畫かばや

なむ

さ月こば鳴きもふりなむ郭公まだしき程のこゑを聞かばや。

我が子、學者にならなむ。

ことしより春知りそむる櫻花あるといふ事はならはざらなむ。

右のばやなむは願望の意をあらはし、共に未然形につく。

注意。「鳴きもふりなむのなむの如く連用形につくものは、現在完了のぬの未然形に未來のむの結びつきたるものなり、助詞のなむと混すべからず。

八 にへ

學校に行く。 大阪に住む。

前へ進む。 彼方へ向ふ。

へ に

右のには場所を示し、へは方向を示す。

口語においてはへもにも同じやうに用ひらる。

學校へ行く。

東京へ行く。

九 がにを

大に努力せしが遂に效なかりき。

日暮れたるに宿るべき家もなし。

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ

野路の村雨。

右のがにをは語句を接續する助詞にして、活用する語の連體形に結びつく。

口語にてはがは文語と同じくにをはのにに相當す。

二 てで

を に が

で て

日くれて道遠し。

言はでやみぬ。

(ではすての變化したるものなり)

右のてでは語句を接續する助詞にして、ては連用形にては未然形に結びつく。

練習二

練習

一、左の文中における助詞を説明せよ。

(イ) 今度は神あしらひにしつゝ悦び歸りきとぞ。

(ロ) 宜なるかな、世人東郷大將を呼んで東洋のネルソンといふことや。

(ハ) すべて月花をばさのみ目にて見るものは。

(ニ) 夢ぞ知りせばさめざらましを。

(ホ) げに聞くだに涙の種ぞかし。

(ヘ) 君が代は千代に八千代にさ々れ石の巖となりて苔のむすまで

- (ト) 良からぬ小説などな讀み給ひそ。
- (チ) 我に對する爲にはあらで先生を敬する爲にてありけるよ。
- (リ) 山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我れ見はやさむ
- (ヌ) 今朝來鳴きいまだ旅なる時鳥花橋に宿はからなむ。

二、左の文に誤あらば正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) 今のうちに勉めずむば、老ひて後に悔ふれども及ばざらむ。
- (ロ) この陣地さへ落せば他は憂ふるに足らず。
- (ハ) 成績あしとも失望するに及ばず。
- (ニ) 雨は降るども風は吹かず。
- (ホ) もし不都合の點あれば、指摘せらるべし。
- (ヘ) 明日御閑暇に候へば御越し下されたく候。
- (ト) 車へ乗りて行かむ。
- (チ) 立錐の餘地さへなし。

接頭語

一 接頭語

單獨にては用をなさざる語の、ある他の語の上につきて、其の語と熟語をなすものを接頭語といふ。

さ|夜、を|川、み|山、は|つ|春、う|ひ|陣、た|走る、は|の|見
ゆ、か|弱し、け|高し、生|やさし、も|の|寂し。

接頭語には意味を添ふるものと、然らざるものとあり。而して接頭語の添はりてなれる熟語はもとの語と品詞を同

- (リ) 敵衆いとも恐るるな。
- (ヌ) 恨に報ゆに徳を以てす。
- (ル) 世人に譏らるが心憂しのみ。

第十章 接頭語接尾語

接尾語

じうす。
うち見る、さし招く、ひき受く。
右のうちさし、ひきはもと動詞なれども、その本の意を失ひて、接頭語となりたるなり。

二 接尾語

單獨にては用をなさざる語のある他の語の下につきて、其の語と熟語をなすものを接尾語といふ。

友どち、奴ばら、君がた、二つづつ、厚み、黒さ、
悲しげ、春めく、黄ばむ、男らし、夜すがら、
接尾語はいづれも或る意味を添ふるものなり。而して接尾語の添はりてなれる熟語は接尾語の性質によりて品詞を異にす。

枕詞 一種の修飾語にん名詞動詞形容詞副詞等を修飾する
さしと右来りの修飾語にて
某語の枕詞は何と云ふを
ゆゑに任意に
使甲すべからず

八雲之 出雲云々
花

とよみ 此の
大にゆ 此の

(例) 是引つ山鳥の尾の
しはう尾の長く、夜を
獨り可も宿帳ん

心持のな
夫の(口)のさし
高き家に居るとをさし
夫の(口)のさし

第十一章 品詞の轉成

一 轉成の名詞

- (イ) 動詞の連用形より || 光 霞 氷 謠
- (ロ) 動詞の終止形より || 茂 薰 勝(以上人名) かげろふ すすまふ
- (ハ) 形容詞の語根に接尾語みさげを添ふ。
厚み 重さ 惜しげ
- (ニ) 形容詞の終止形より || あかし(燈) すし(鮓) からし(芥子)
- (ホ) 形容詞の語根より || 白 黒 赤

二 轉成の代名詞

三 轉成副詞

(イ) 名詞より 君。僕。小生。殿。臣。

(イ) 名詞より。

今日雨降る。明日御歸りになりますか。

(ロ) 動詞の連用形より。

たとひ雨降るとも……………。

それはあまりひどいことです。

(ハ) 形容詞の連用形より。

水早く流る。花美しく咲く。

四 轉成の接續詞

(イ) 名詞より。

あつさ甚しく候處……………。

練習三二

練習

(ロ) 動詞より。

土曜日及び日曜日は休業す。

(ハ) 副詞より。

山また山を越ゆ。

一、左の文章中より接頭語と接尾語とを摘出せよ。

(イ) さ夜ふけてはの暗き御あかしの影ものさびし。

(ロ) 御刀の汚れにて候。雑卒ばらの手にかゝり給はゞ末代までの御

恥辱にて候。

(ハ) 春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む。

(ニ) 秋らしくなりていと露けし。

二、形容詞の轉じて副詞となれるもの五六をあげよ。

三、左の名詞の構成を説明せよ。

たうる田植。よろこび。楽しみ。讀み書き。憂。末廣。振舞。

文章篇

第一章 文の成分

主語・述語

主語・述語

(一) 犬 走る。

鳥 飛ぶ。

魚が 躍る。(口)

(二) 山 高し。

水 清し。

大軍 雲霞の如し。

花が 美しい。(口)

(三) 正成は 忠臣なり。

述語は又説明語ともいふ。

文の主成分

犬は動物だ。(口)

右の例の(一)は「何がどうする」。(二)は「何がどんなだ」。(三)は「何が何だ」といふ形式の文なり。而して「何が」に當るもの、即ち文の題目を表す語を主語といひ、「どうする」「どんなだ」「何だ」に當るもの、即ち敘述を表す語を述語といふ。

主語と述語とは如何なる文にも缺くべからざるものなれば、これを特に文の主成分といふ。

(一) 鳥 鳴く。

風 涼し。

(二) われも 歸る。

空は 青し。

右の例の如く、主語は體言が單獨に表るゝ場合と、下に助詞

の添はりて表るゝ場合とあり。

死ぬるは 悲し。

赤きが よし。

右の例の如く、主語は又體言に準すべき語よりなることあり。

(一) 白雲 飛ぶ。

月 清し。

(二) 夜も 明けたり。

花 咲きぬ。

(三) 旅行は 樂しかりしか。

右の例の如く、述語は用語よりなり、更にこれに助動詞・助詞の添はりて表るゝものなり。

(一) 尊氏は 逆臣なり。

君 君たり。

怒濤 山の如し。

(二) 花の 散るなり。

水の 清きなり。

歲月 流るゝ(が)如し。

右の例の如く、述語は又體言若しくは用言の下に、指定の助動詞なりたり、比況の助動詞如し等の連りたる語より成ることあり。

支那は 國 大なり。

象は 鼻 長し。

右の例の如く、ある一つの文章が、更に或る主題の述語とし

文主

て用ひらるゝことあり。この主題たる語を文主又は總主語といふ。

修飾語

修飾語

(一) 赤き花 咲く。

(二) 風 烈しく吹く。

山 甚だ高し。

右の例に於て、形容詞赤きは花を修飾し、副詞烈しくは吹くを、副詞甚だは高しを修飾す。かくの如く文中にありて、他の語を修飾する語を修飾語といふ。而して赤きの如く體言を修飾するを形容詞的修飾語といひ、烈しく、甚だの如く用言を修飾するを副詞的修飾語といふ。

形容詞的修飾語

形容詞的修飾語

我が庭に 美しき朝顔 咲けり。

静かなること 林の如し。

長閑な光が 油のやうな海面に融けてゐる。(口)

進歩主義は 有爲なる國民の忘るべからざる要訣なり。

渦巻く波に とび込んだ。(口)

寒からぬ雪は 雲なき空よりこぼれて、顔を撲つ。

右の如く形容詞的修飾語は形容詞の連體形若しくはこれに準ずる語なり。

副詞的修飾語

副詞的修飾語

食指 おのづから 動く。

太閤は 平常 鶴を 愛せられたり。

鐵道 不通に なること 往々にして あり。

津々として 詩趣を 生ず。

一切の物音は はたと 絶えた。(口)

今朝 東京へ向けて 出發した。(口)

午後一時より 講演會を 開く。

あちらへ行け。

今度は やめます。(今度はは主語にあらず注意すべし。)(口)

春はくれども 花 咲かず。

右の如く副詞的修飾語は、副詞若しくは副詞に準ずる語なり。

猫 鼠を 捕ふ。

太郎は 級長と なつた。(口)

面は 猿に 似たり。

客語

二の三倍は 六に 等し。
 父 家を 子に 譲る。
 われ 下女に 庭を 掃かしむ。
 犬 人に 打たる。

上文傍線を施せる語は、すべて客語なり。但、便宜上これを副詞的修飾語とす

獨立語

獨立語

- (一) 太郎や、おまへもう學校に行かないかえ。(口)
 あれ見給へ、箱王殿。空をとぶ翼も皆別の翼ぞまじへざりける。
 (二) あゝ、花が咲いた。(口)

やあ、いかに、あれなるは佐野源左衛門の尉常世か。
 右の例の太郎や、箱王殿、(呼掛の語)あゝ、やあ、いかに(感動詞)は、文の主要部には關係なきものなり。かくの如き語を獨立語といふ。

練習三三

練習

左の文中より、主語・述語・文主・修飾語・獨立語を摘出し、猶、修飾語はそのいづれの語を修飾せるかを説明せよ。

- (イ) 中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といふ。
 (ロ) ねむさうな雞の聲のする村もすぎけたたましく、犬の吠えかかる村も過ぎた。
 (ハ) 天下の事、つとめてやますんば、遅くとも、一たびは成就すべし。
 (ニ) 秋のあはれ閑寂の趣は、却てわが庭の一枝にあるべし。

青白し、寒くつめて
 秋のあはれ閑寂の趣は、
 却てわが庭の一枝にあるべし
 おとけたる一寸法師
 舞のあはれよ
 秋のあはれ閑寂の趣は、
 却てわが庭の一枝にあるべし

- (ホ) 健全なる精神は、健全なる身體に宿る。
- (ヘ) 西山の花見る人は、多く御室を指す。
- (ト) 正確なる智識は、鋭利なる機械の如し。
- (チ) 兎は前足が短い。
- (リ) 帝國議會は毎年之を召集す。
- (ヌ) 拍手急霰に似たり。
- (ル) 誦經の聲遠く響きて鶯の歌、こしなへに高き梢にあり。
- (ヲ) 彼は、性質極めて温順なり。
- (ワ) いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。

第二章 文の成分の位置と省略

正序法

(一) 主述

一 正序法

- (一) 庭主の朝顔主、美述しく咲述けり。

(二) 主客述

- (二) 隣家主の猫主、大客きな鼠客を巧述に捕述へたり。

右は文の成分の位置の普通なるものなり。これを正序法といふ。而して修飾語は常に修飾せらるゝ語の上に来る。これ我が國語の一特色なり。

倒序法

二 倒序法

- (一) 美述なるかな、山河主のかため。
- (二) たれ述ですか、君主は。
- (三) 雲述のいづこ客に月主やど述るらむ。
- (四) 僕客の本客をだれ主が持つていつたらう。

右は文の語調を調へ、或は語勢を強めんがために、文の成分の位置を替へたるものなり。これを倒序法といふ。

省略法

三 省略法

(一) 人を相手にせず、天を相手にせよ。
 (二) この處に塵芥捨つべからず。
 (三) 福は内、鬼は外。
 (四) 彼は末頼しき少年にこそ。
 (五) 神よ、願はくは助け給へ。
 (六) さて主上はいづこにおはしますぞ。 黒戸の御所に。
 上皇は。 一本御書所に。 内侍所は。 温明殿に。 劔
 璽はいづこに。 夜の大殿に。

右の(一)(二)は主語、(三)(四)は述語、(五)は客語、(六)は種々の成分の省略せられたるものなり。 かくの如く文はまた、冗長を避け、
 文意を強めんがために、其の成分を省略することあり。 **これを省略法**といふ。

練習二四

練習

左の文中にある倒序法省略法について説明せよ。

- (イ) 油断イ大敵ナリ
- (ロ) 祝へ諸人もろともに。
- (ハ) 人の噂も七十五日。
- (ニ) 人は誹るとも、我は咎めず。
- (ホ) 千里の道も足もとより。
- (ヘ) 請ふ、これを歴史に徴せむ。
- (ト) 東京へと志しぬ。
- (チ) われに惜むな、家づとの一枝の筆の花の色香を。
- (リ) 道路の左側を通行すべし。
- (ヌ) 春來ぬと人はいへごもうぐひすの鳴かぬ限はあらじとぞ思ふ。

第三章 句及び節

句

句

- (一) 香の高きは梅の花なり。
- (二) かしこに松の生ひ茂れる岡あり。
- (三) 水清ければ大魚棲まず。

右の例の傍線を引ける部分は、いづれも文がその獨立を失ひて、他の文の一部となれるものなり。これを句といふ。句には名詞句・形容詞句・副詞句の三種あり。

- 一 名詞句 — 名詞の用をなすもの。
- (一) 香の高きは梅の花なり。 — (主語)
- (二) 質のよきは價高し。 — (文主)
- (三) われは時のうつるを知らざりき。 — (客語)

名詞句

形容詞句

二 形容詞句 — 形容詞の用をなすもの。

- (一) 雨の降る夜はもの寂し。
- (二) 瀑の落つる音は百雷の轟く響に似たり。

副詞句

三 副詞句 — 副詞の用をなすもの。

- (一) 水清ければ大魚棲まず。
- (二) 天氣晴朗なれども波高し。

節

節

- (一) 東寺の塔は我を迎へて立つ。
- (二) 鴨川の水は、我を迎へて歌ふ。

右はいづれも一つの文なり。今これを重ねて、

東寺の塔は、我を迎へて立ち、鴨川の水は、我を迎へて歌ふ。

といへば、又一つの文となる。この場合に於て傍線の部分は各對立したるものにて、一方が他の一方の附屬にあらず。この各の部分を節といふ。

練習二五

練習

- 一、左の文中の句と節とをあげ、且つ句につきてはその何句なるかを答へよ。
- (イ) 味のよき魚は波の荒き海に住む。
- (ロ) 能ある鷹は爪をかくす。
- (ハ) 無理が通れば道理が引込む。
- (ニ) 秋高く馬肥ゆ。
- (ホ) 腦の良いのは一生の徳だ。
- (ヘ) 残暑凌ぎ難けれど、樹間叢裡已に秋の聲あり。

構造上の種類

單文

第四章 文の構造上の種類

文は構造上より、左の三種に分類することあり。

一 單文

- (一) 鳥 啼く。
- (二) われ 花を嵐山に 観る。

右は主語と述語との關係唯一回成立せる文にして、かゝる

複文

文を單文といふ。

二 複文

(一) 春は來れども 鶯鳴かず。

(二) 景色の麗しきは 天橋立なり。

(三) 景色の麗しき天橋立は 丹後國にあり。

右は一つ以上の句を含み、主語と述語との關係の二回以上成立せる文にして、かゝる文を複文といふ。

重文

三 重文

(一) 花咲き、鳥啼く。

(二) 病は口より入り、禍は口より出づ。

右の如く二つ以上の節を有する文を重文といふ。

性質上の種類

第五章 文の性質上の種類

平叙文

一 平叙文

文は性質上より、左の四種に分類することを得。

(一) 雨降り風吹く。

(二) 猛虎一聲山月高し。

(三) 山高く月小なり。

右の例の如く、單に事實をありのままに叙述する文を平叙文といふ。

疑問文

二 疑問文

(一) わが艦の敵に降れるものなきか。

(二) 雲の何處に月宿るらむ。

命令文

(三) 誰か最も賢き。
 (四) 精神一到何事か成らざらむ。
 右の例の如く、疑問の意をあらはすもの、或は反語の意をあらはす文を疑問文といふ。

三 命令文

(一) よく學びよく遊べ。
 (二) 早く着物を着よ。
 (三) 明日午前八時出頭すべし。
 (四) 無用のもの入るべからず。
 (五) 主なしとて春な忘れそ。
 右の例の如く、命令・禁止の意を表す文を命令文といふ。命令文には主語の省略せらるるを常とす。

感動文

四 感動文

(一) あはれ、この幾ひらこそまたも得難き形見なれや。
 (二) 忠なるかな、楠氏。
 (三) あゝ、はなはしくも果敢なかりし君が一生かな。
 (四) もうそんなに成るのかなあ、卒業してから。(口)
 右の例の如く、感動の意を表する文を感動文といふ。感動文には主成分の完備せざること多く、又成分の倒置せらるること極めて多し。
 右に説けるが如く、成分の倒置・省略は文の性質に關すること大なるものなり。

練習二六

練習

一、次の文は構造上及び性質上如何なる種類に屬するか。

- (イ) 義は泰山より重く、死は鴻毛より輕し。
平叙
- (ロ) あはれ、今年の秋も往ぬめり。
後
- (ハ) 己の欲せざる所は、人に施すなかれ。
- (ニ) 炊煙の空高く上るも見ゆれば、人家は近かるべし。
- (ホ) 明日天氣よくば、旅行し給ふか。
- (ヘ) 芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞く。
- (ト) 枯枝に鳥のとまりけり、秋の暮。
- (チ) 借も氣の毒な事よ、願の下が乾きては誰も難儀ならん。
- (リ) 英國は各自がその本分を盡さんことを期待す。
- (ヌ) 常に良き著述に親むものは、只獨り居れども寂しきことを覺えず。
- (ル) 夏山になくほととぎす心あらば、物おもふわれに聲な聞かせそ。
行々

中等新國文典終

- (ヲ) 秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。
- (ワ) 年豊かなれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。
- (カ) 嗚呼、うたてしき事かな。
- (ヨ) あゝ、誰が造りなしけむ自然の美しさよ。
- (タ) 別離の恨、何ぞ獨り悵として盡き難きや。
- (レ) 芹は春のはじめのものなり。
- (ソ) 家陋なりといへども、膝を容るべく、庭狹しといへども、碧空を望むべし。
- (ツ) 湊川は楠木正成の戦死せし所なり。
- (ネ) 人も學びて後にこそ、誠の徳はあらはるれ。
平叙

附錄 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」「ナド」用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ
 - 例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ
 - 金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ
- 四 「コトナリ」「異」ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
 - 例 手習サス
 - 周旋サス
 - 賣買サス
- 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
 - 例 罪サル

評サル

解釋サル

- 七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ
 - 例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
 - 上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ズルコトヲ得セシムベシ
- 八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ
 - 例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
 - 攻撃開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ
- 九 てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ
 - 例 花ヲ見ルノ記
 - 學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
 - 市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ
- 一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ
 - 例 有ルヤ

面白キヤ
父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

二 てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アル
モノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラル、トモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

三 てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル
習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 月出ヅルト見エテ

嘲弄セラル、ト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

三 語句ヲ列舉スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語
句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例 月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例 誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ)應募者ハ多カルベシ

一六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例 イハユル哺乳獸ナルモノ

顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セラルルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律セシハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ、文部省ニ於テハ、從來破格又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉グ之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ、教科書檢定又ハ、編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

【表二】

【表】

口語		書		終止		連體		已然		命令	
ラ	ナ	カ	キ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
ル	ニ	ク	ク	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
ル	ヌ	ク	ク	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
レ	ネ	ケ	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
レ	ネ	ケ	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ

口語		書		終止		連體		已然		命令	
ラ	ナ	カ	キ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
ル	ニ	ク	ク	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
ル	ヌ	ク	ク	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
レ	ネ	ケ	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ
レ	ネ	ケ	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ	ク	ケ

淡月... 終止... 連體... 已然... 命令... 口語... 書... 終止... 連體... 已然... 命令... 淡月... 終止... 連體... 已然... 命令... 口語... 書... 終止... 連體... 已然... 命令...

〔表四〕

日瑞曲禮爾番里表									
第	一	二	三	四	五	六	七	八	九
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十

表 用

推
量

ま	ら	べ
じ	し	し
く		
く		
○	○	し
き		
けれ		
一		

詞 容 形

表 用 推 量

ま	ら	べ
じ	し	し
く		
く		
○	○	し
き		
けれ		
一		

【表 三 第】

表 用 活 詞 動 助 語 文

否 定	希 望	比 況	推 量				否 定	指 定		時				崇 敬	使 役	崇 可 受 敬 能 身		の 種 類	助 動 詞
			た し	こ じ	ま じ	ら し		べ し	べ か り	ざ り	な り	た り	け り			た り	り		
す	く	く	く			ら	ら	ら	ら	ら	ら	な	て	め	せ	れ		未然	活 用 形
す	く	く	く			り	り	り	り	り	に	て	め	せ	れ		連用		
す	し	し	○	○	し	り	り	り	り	り	ぬ	つ	む	す	る		終止		
ぬ	き	き	き			る	る	る	る	る	ぬ	つ	む	する	る		連體		
ね	けれ	—	けれ			れ	れ	れ	れ	れ	ぬ	つ	む	す	る	れ		已然	
—	—	—	—			れ	れ	—	—	—	ぬ	て	め	せ	よ	れ		命令	
用活詞容形			用活格變行ラ				ナ變	用活段二下											

【表 四 第】

表用活詞動助語口

推量	時		指定	時	希望	推量	否定	使役		崇敬		受身	可敬	助動詞	の種類
	ま	う						さ	せ	ら	れ				
まい	よ	う	だ	た	た	ら	な	さ	せ	ら	れ			語	
—	—	—	だ	た	—	—	—	せ	—	—	—	—	—	未然	
—	—	—	だ	—	—	—	—	せ	—	—	—	—	—	連用	活
まい	—	—	だ	た	—	—	—	せ	—	—	—	—	—	終止	用
—	—	—	—	た	—	—	—	せ	—	—	—	—	—	連體	
—	—	—	—	た	—	—	—	せ	—	—	—	—	—	已然	形
—	—	—	—	—	—	—	—	せ	—	—	—	—	—	命令	
用活殊特				用活詞容形				用活段一下							

【表 三 第】

表用活詞動助語文

推量	時		否定	希望	比況	推量				否定	指定	時				崇敬	使役							
	ら	け				む	き	じ	す			た	ご	ま	ら			べ	べ	ざ	な	た	け	た
ら	け	む	き	じ	す	た	ご	ま	ら	べ	べ	ざ	な	た	け	た	り	ぬ	つ	し	さ	す		
—	—	—	—	—	す	く	く	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	す	く	く	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
む	む	き	じ	す	し	し	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
む	む	し	じ	ぬ	き	き	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
め	め	しか	じ	ね	けれ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
用活種特				用活詞容形				用活格變行ラ				ナ變				用活段二								

【表 六 第】

法續接のと詞容形詞動と詞助續接

詞 容 形	詞 動	
と も ば	で ば	未然形
	つ つ て	連用形
	と も と	終止形
に を が	に を が (と も) (と)	連體形
んご ば	んご ば	已然形

●括弧内のは今文にのみ用ひらるるもの。

り (サ變に 限る)
ラ變に限り づ連體形につ
の、が、に、つ、く、こ、と、あ り。

第】

【表 五 第】

と 詞助續接

動		
で	ば	未然形
つ	て	連用形
と	と	終止形
が	(と) (と)	連體形
ご	ご	已然形

法 續 接 詞 動 助 詞 動

り (サ變に 限る)	まほし	じ	ざ	ず	ま	む	し	さ	す	ら	る	未然形に
			り		し		む	す		る		連用形に
					た	け	け	き	たり (時)	ぬ	つ	終止形に
づ 連體形に 限る					なり (咏嘆)	ま	め	ら	べ	べ	ら	連體形に
り。 づの くは こと助 にあ詞 あ						じ	り	し	べ	ご	なり	已然形に
										り (四段 用 に 限る)		已然形に

【表 六 第】

法續接のと詞容形詞動と詞助續接

詞 容 形	詞 動	
と も ば	で ば	未然形
	つ つ	連用形
	と も	終止形
に を が	に を が (と も) (と)	連體形
と も ば	と も ば	已然形

●括弧内のものは今文にのみ用ひらるるもの。

【表 五 第】

法續接詞動助詞動

り (サ變に 限る)	まほし	じ	ざ	す	ま	む	し	さ	す	ら	る	未然形に
			り		し		む	す		る		連用形に
					た	け	け	き	たり(時)	ぬ	つ	終止形に
					し	む	り					連體形に
					なり(咏嘆)	ま	め	ら	べ	べ	ら	終止形に
						じ	り	し	べ	し	む	連體形に
									ごとし		なり	連體形に
												已然形に
											り (四段括 用に限る)	已然形に

ラ變に限り
連體形につ

なりは體言
にもつづく。
如しは助詞
の、がにつ
づくことあ
り。

Karla
yo

大正十一年十月二十五日印刷
 大正十一年十月二十八日發行
 大正十二年一月十日訂正再版印刷
 大正十二年一月十三日訂正再版發行

中等新國文典 定價 金參拾八錢
大正十二年度 臨時定價金六拾五錢

不許複製



中等新國文典

著者 吉澤義則

發行者兼 東京市神田區表神保町貳番地
 鈴木常次郎

發行者 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
 鈴木常松

發行所

東京市神田區表神保町二番地
 振替口座(東京二六四四番)
 大阪市東區博勞町五丁目
 振替口座(大阪四七一番)

修文館

四、助動詞を指して説明。B、傍線の助詞の異同を説明せよ。

a、垣に咲ける花のえもいはず美しきが眼につきぬ

長花の散るらん惜しき。いざ櫻我も散りなん。梅は散らば散りなん。

c、たの文につき主語述語修飾語を説明せよ。

はちす葉のにこりに染まぬ心もて何かは屋路を玉とあきむく

次上、

(二) 動詞活用の識別法を述べよ。三

四、助動詞を指して説明。B、傍線の助詞の異同を説明せよ。

a、垣を咲ける花のえもいはず美しきが眼につきぬ

長花散るらん惜しき。いざ櫻我も散りなん。梅花散らば散らん。

c、たの文につき主語述語修飾語を説明せよ、

はちす葉のにこりに染まぬ心もて何かは屋路を玉とあざむく

次上、

(二) 動詞活用の識別法を述べよ。三

Handwritten notes on a separate piece of paper, partially overlapping the main page. The text is mostly illegible due to fading and angle, but some characters like '山' and '川' are visible.

一 次の例に就て 動詞活用形の何々々々

3. 次ノ文中ニ誤ラバ正シレ傍理由ヲ記セヨ
4. 年若きは老かえん氣衰一リ
○ 正シカと思ふたをを行えば
(以上七十分)

(二) 動詞活用の識別法を述べよ。三
○ 生くると死ぬると、いづれが難き。
○ 興衰を愛け、名を揚ぐ。
を説明せよ。

3. 次ノ文中ニ誤ラバ正シ傍ニ理由ヲ記セヨ

ノ年ハナハ大老カイエニ氣衰一リ
口正シカト思フ大正ヲ行エバイ

(以上七十分)

(一) 次ノ例ニ就テ 動詞活用形ノ何々々カ
ヲ説明セヨ

○ 生くると死ぬると、いづれカ難キ。

○ 興衰を愛け、名も揚ぐ。

(二) 動詞活用ノ識別法ヲ述ベヨ。三

0. 11-12
2. 11-12
3. 11-12

三年 文法

(一) 次の例に就て、動詞活用形の何々たるかを説明せよ。

○ 生くると死ぬるといづれが難き。

○ 與食を愛け、名を揚ぐ。

(二) 動詞活用の識別法を述べよ。

三年 文法

(一) 次の例に就て、動詞活用形の何々たるかを説明せよ。

○ 生くると死ぬると、いづれが難す。

○ 與言も愛げ、名も揚ぐ。

(二) 動詞活用形の識別法を述べよ。

の 文法

Handwritten notes in the top right corner, including circled characters and illegible text.

廣島縣第一甲學校生徒
廣島縣第一甲學校生徒
廣島縣第一甲學校生徒

中村本啓三



広島大学図書

200080453

